

エスペラントは心の国境を消すことばです

*Organo de HOKKAJDA ESPERANTO-LIGO*

# Heroldo de HEL

N-ro 130

Julio 2010

HOKKAJDA ESPERANTO-LIGO

北海道エスペラント連盟

[Enhavo/目次]

- 表紙、Enhavo/目次 P. 1
- Raporto de la Frusomera Kunloĝado 2010 de HEL/ P. 2  
2010年HEL初夏合宿報告/ 川合由香、かばやま ゆうすけ、星田淳
- Cignoj — la poemo por komencantoj / P. 6  
白鳥 — 初心者のための 詩/(Betululo)
- Rizhao (日照) /Sawaya Yuiti (沢谷雄一) P. 8
- Mia plezuro versi hajkon/ P.13  
俳句の たのしみ/Gotoo Sumiko
- Danke ricevitaj — 受領郵便物— (星田淳 扱い) P.17
- [第4回委員会報告] Protokolo de la 4-a Komitata Kunsido P.19
- [第5回委員会報告] Protokolo de la 5-a Komitata Kunsido
- [編集後記/Redaktanto parolas ...] P.20

\*同封: LA PACIFIKA KURIERO Junio 2010

(La informilo de la Asocio de For-Orientaj Rusiaj Esperantistoj)

ウラジオストクで発行されている極東ロシア・エスペラント協会の機関誌

## 2010年HEL初夏合宿報告

Dum la 5a kaj 6a tagoj de junio okazis nia "Frusomera Kunloĝado" en Sapporo. Partoprenis 23 kaj sin ekzercis en tri klasoj. (La red.)

### 〔入門クラス〕

KAWAI Yuka/ 川合由香

6月5日(土)・6日(日)の2日間にわたり、HEL恒例の初夏合宿が行われました。今年で3年目となる札幌市西区西野の柴田内科循環器科研修センターを会場にお借りして、総勢23名の参加を得ました。直前になって、中級会話の講師を依頼していたセルゲイ＝アニケーエフ氏が突発的かつのっぴきならない急用のため不参加となり、合宿本番前の3日間で講師陣を再編するという想定外の「事故」がありました。結果、中級会話はveteranoの星田委員長、初級会話は会話上達法に一家言お持ちの(「Heroldo de HEL」前号参照)樺山裕介氏、入門講習は川合が担当することになりました。

昨年「参加者同士の交流が盛り上がる」と好評だった、s-ino 椿による夕食(カレーライス)と朝食(親子丼)は今年も反応上々でした。大量の食事を手際よく整えるのは素人には難しいものですが、s-ino 椿は炊き出しボランティア経験にものをいわせて腕をふるってくださいました。深謝。

初級・中級の報告は別に出ていますのでご覧下さい。

以下、入門講習の報告です。

入門参加者は4名でした。うちお2人は過去に初夏合宿に参加したことのある方で、エスペラントとはどんな言語か、おおよそのところはご存じでした。他のお2人に「何(なに)でこの合宿を知ったか」(宣伝媒体)を尋ねたところ、1人が北海道新聞の案内記事、もう1人がHELのホームページでした。また、いったん参加を申し込み、前夜になって「急用ができた」と残念ながら欠席された方は、かでのる2.7に置いたチラシを見て連絡をくれたのだそうです。行事の広報はいつも頭を悩ませるところですが、新聞掲載依頼・ホームページ・チラシのどの方法もそれぞれ有益だと分かりました。

入門講習の難しいところは、受講者側の希望(文法をきっちり知りたい人もいれば、とにかく口を動かしたい人もいる)や語学学習上のkapablecoにきめ細かく対応しなければならない点にあります。ことに、それらが複数名の参加者の間でまちまちな場合はなおさらです。今回は、エスまたはさまざまな外国語をかじった経験のある方々だったので、その点の困難はほとんどなく、たとえば文法用語

をじゃんじゃん使っても大丈夫でしたので、講師としては楽をさせていただきました。

今回はJEI から出ている「国際語エスペラントへの招待」というパンフレットの中の「入門講座」をテキストに使いました。

初めにエスの歴史・実用の楽しみ（パスポルタ＝セルヴォ；川合の『Pasporta Servo』を見せると「アフリカにも登録者がいる！」と驚きの声が上がりました。また、加賀谷さんご夫妻の世界旅行のブログの抜粋が載っている「Helordo de HEL」も配りました）・日本でのエスの認知度などについて雑談をして導入としました。雑談のilo として川合が持っていった『ダーリンは外国人』第2 巻（小栗左多里著）の、ダーリンことトニー＝ラズロ氏がエスを学ぶ様子を漫画で描いたページが参加者の笑いを誘っていました。

続けて文字と発音（ĝとj の区別が講師を含め難しかったため、多く時間を割きました）、人称代名詞、対格、Mi amas vin. 型の文、単数と複数、語尾の付け替え、動詞の時制、造語法まで初日にこなし、20時頃に星田さんの中級会話クラスと合流（乱入とも言う）して「Ridu, ridu」を歌いました。2 日目は発音の復習と歌、例を見ながら短い手紙を書く練習、挨拶、そしてテキストには無かったのですが独習に備えて合成時（分詞）を説明しました。最後に（入門講習を随時受け付けている）札幌エス会の連絡先を教え、藤巻謙一さんの通信講座を紹介して終了としました。独習のためのお土産として「La Semo de Esperanto」と「橋渡しの言葉エスペラント」を渡しました。

今回の入門参加者には「悠々自適」の方はお1 人で、お2 人は決まった曜日が休みではないという勤務形態でした。そういった方に学習を続けてもらうには、通信講座のように時を選ばずに学べる方法が必要でしょう。同時にやる気を保つためにはJEI やHEL などの会に入ってくださいとよいと思うのですが、こちらは会費を払ってもよいと思ってもらえるような魅力を伝えないと難しいようです。

今回もその場での勧誘は成功しませんでした。ともかく4 人の皆さんは、一応の満足を得て帰られたようです。講師としてはほっとしました。皆さんの中に芽生えたエスへの興味の芽が、順調に伸びてくれることを願っています。（了）

#### [2010年初夏合宿初級会話クラス]

かばやま ゆうすけ

私が担当した初級での内容を紹介します。「聴く」「読む」「話す」「書く」の全てに時間を割り当てるように考えました。昨年、藤本達生氏に来ていただいたときには、ひとりずつ順番での音読だったため、生徒ひとりあたりの発音量が少なくなってしまった面もありました。そこで、今回は、講師に続いて全員で発

音するという練習を意識して多くしました。

1 すべての母音と子音の確かな発音からやり直しました。日本語にはない多重子音の入った単語の発音を、二重、三重、四重子音と、順を追って練習しました

2 実際の会話でほとんどをカバーできるだろう約500の基本単語と、16条基本文法とその番外(ki-単語)のおさらいを軽く流しました。

3 基本単語だけで書いた詩と、ハンガリーから私に来た葉書を聴いてもらい、わからないところを自由に想像してもらうことで、完璧主義を排そうとしました。その後で詩と葉書を見てもらい、ギャップを楽しむことを試みました。

4 ザメンホフの「練習問題集」"Ekzercaro"から選んだ文を、繰り返し繰り返し繰り返し繰り返し、壊れて針が飛んだレコードのように講師が音読しました。それを生徒が聴き取って書き、後で講師が直しました。いわゆるヒアリングです。

5 故・伊東三郎氏の小論「感の言語と理詰めめの言語」の一部を聞いてもらいました。カタコト段階こそが大切であると述べた文です。

6 月刊「エスペラント」に連載している阪直氏の「やさしい作文」を使い、エス作文をしました。

7 菊島和子氏の「会話独習法」に習い、歩き回って、部屋のなかにあるものについて独り言を言ってもらい、講師は生徒の中を巡り歩いて、生徒とのエスでの会話を試みました。

8 聖歌「希望」"La Espero"の1番を歌いました。

生徒さんたちの感想を聞く機会がわずかしかなかったので、やむを得ずかってに自分に甘く自己評価してみます。

1 この段階から参加した生徒さんたちは、2日間、ずっといい発音をしていました。きれいな発音は他人に優しく自分にも得なエスペラントです。みなさんツボを押さえました。

2 Zlatko Tis`ljac という人の研究によると467の基本語根で会話の95%はカバーできるそう。これをメールで吹田エス会の篠原陽介氏から教えられたのは、つい最近のことです。私が配布したのは阪直氏が選んだ基本語根ですが大差はありませんので、四捨五入で生徒さんに吹きますと、安心感を伴った好反応が一部からありました。ただ、これを全部、みんなで音読しようとして途中で挫折しました。

3 これは完全主義でこわばっていた入門者に対して私が使ったことのある手段の応用です。生徒さんたちのレベルがすでに高かったので、あまりギャップをどうこうできませんでした。また、入門者相手では聴くと読むだったのに対し、今回は聴くだけから種明かしだったので、少し違ってが違ったことも課題です。ただ、「わからなくてもいいんだ」という声を誰かが洩らしているのが聞こえたときは、やってよかったんだと思いました。

4の「こわれたレコード」は、札幌市白石区でアイヌ語教室を指導している奥田統己・札幌学院大学准教授のやり方をまねたものです。アイヌ語教室では、白沢ナベさんという古老が語ったウウェペケレ（昔話）を録音したディスクを、ノートパソコンでひと区切りずつリピートを延々とかけて聴かせて書き取らせ、辞書を引かせて日本語に訳させました。生徒の解答を先生が直しながらアイヌ語について解説し、理解できたところで、最後にノートパソコンから出てくるナベさんの発音と声調、抑揚までもをそっくりまねるよう努めて、まずみんなで、そしてひとりずつ発音しました。「祭壇の下に隠れていた悪い熊を退治した女の物語」と、もうひとつ熊の話でした。毎回、アイヌ語への聴覚と理解力が成長していく充足感がたまりませんでした。

これをエス教室で、パソコンという機械の代わりに、生身の口でやったのです。さすがに横隔膜の長期連続運動で体力を消耗しました。ただ、不思議と、口やのどは疲れませんでした。私のエスは、後ろにあるアクセントを高くして、他は平坦にするという、関西人流の抑揚ですが、（関東人は、他を平坦にしないで頭から急上昇する。スラヴ人は、アクセントを低くする。）、子音母音は正確です。正解が多かったですし、生徒さんには、そこそこの自信を持てるような、いままでに無い経験をさせてあげられたのではないのでしょうか？

5 消化していない私が読んで聞かせただけなので、いまの生徒さんの記憶に残っているか定かでないような、消化不良でしょう。みんなで読み合わせて、意見交換してみれば、どうなったのでしょうか。

6 講師自身すらよくわかっていないことについての他力本願は、無力な講師の独自性に比べれば、ずっと良いのです、なんちゃって。ということで、既製のテキストに頼りました。エスは単純ゆえに、かえって迷うものですね。回答者を、くじ引きで選んだところ、最後に引いた人に当たるのが続いたと思えば、最初に引いた人が当たるのが続いて、盛り上がりました。私は何もインチキをしていませんよ。

7については、失敗しました。独習法は、複数ではできないものなのではないのでしょうか？  
また考え直します。

8 入門のころ、毎回歌ったんですよ。

文通していたころの、海外からの手紙や葉書を、入門講習に提供したところ、好反応だったことを、付け加えておきます。

### [中級会話コース]

星田 淳

合宿開始の4日前の朝、講師予定だった S-ro Sergej Anikejev から

メールが入った。彼の勤務するロシア国立極東大学の本学（ウラジオストク）の学長が函館校を視察に来る、通訳として随行せねばならない、とのこと。

> Lia vizito vere estas tute subita kaj ne planita.

と言うから、まさに突発事故のようなもの。

去年このコースは椿さんが担当した。今回もどうか、と連絡したが個人的な事情もあり準備の時間がないらしい。川合さんが入門コースを担当するから私（星田）が中級を担当するように、と提案があり、時間もないので、そのように決定。

中級となると実際に参加者に口を開いて報告、質問、応答 —— つまり会話が自然に続くように工夫せねばならぬ。そこで文章を読んで聞いてもらい、その内容の理解を確かめながら質問してもらい、他の人が答える、というやり方で進めた。

最初に 今回来るはずだった S.A. 講師の書いた文を読んでその内容について話し合った。この文、前にも読んだことがあったが、スターリン時代は終わったはずなのにエスペラントを宣伝すると「ソ連の敵、スパイの言葉だ、そんなものをやると危ないぞ」との「忠告」が舞い込んできたという。「過去の記憶」はまだ消えていない時代だったようだ。

私の分も含め何人かの文を紹介。「口を開いてもらう」事に重点をおいて「誤り指摘」の方は少し手を抜いた感じはあるが、七十代から二十代までの参加者が自分の経験、考えを話しあえた事は成果だったと思う。

今後はさらに楽しみながら高めていくことを考えたい。

---

Cignoj ——— la poemo por komencantoj  
白鳥 —— 初心者のための 詩 (Betululo)

Tago

Birdoj flugas en aero.

En la aero blankaj birdoj flugas.

En la aero flugas birdoj blankaj.

La suno brilas.

Brilas la suno.

La ĉielo estas blua.

Blua estas la ĉielo.

Neĝo estas sur la tero.

Sur la tero estas neĝo.

La tero estas blanka pro la neĝo.

Vespero

Nun la birdoj flugas super lago.  
La lago estas sub la birdoj.  
La birdoj flugas malsupren.  
La birdoj flugas al sur la lago.  
La birdoj flugas sur la lagon.  
Jen la birdoj atingas la surfacon de la lago.  
Jen la birdoj estas sur la akvo de la lago.  
La birdoj jam ripozas sur la akvo de la lago.  
La birdoj flugis, sed la birdoj jam ne flugas.  
Ili flugis, sed nun ili ne flugas.

Nokto

La birdoj dormas sur la akvo.  
Fiŝoj dormas en la akvo.  
Dormas bestoj. Dormas plantoj.  
Ĉiuj vivajoj dormas.  
Ĉiaj vivajoj dormas.  
La luno brilas sur la ĉielo.  
La steloj brilas sur la ĉielo.

Mateno

La ruĝa brilo de la suno vekas la birdojn.  
La birdoj ne flugas sed baldaŭ flugos.  
La birdoj komencas kuri sur la akvo.  
La birdoj ekkuras sur la akvo.  
La birdoj kuras sur la akvo.  
La birdoj kuradas sur la akvo.  
La birdoj ekflugas de sur la akvo !  
La birdoj flugas supren kaj supren.

## R i z h a o (日照)

Sawaya Yuiti (沢谷雄一)

S-ro 沢谷雄一 (1970年代まで HEL委員、事務局長、現在伊達市在住) から中国の旧友訪問記が寄せられました。中国の地名を少し説明します。

ローマ字 (ピンイン) 表記、(エスペラントによる近似発音の表記) :  
漢字表記 を示します。(La red. )

Qingdao (Ĉingdaŭ) : 青島、 Rizhao (Jigau) : 日照、

Jinan (Ĝjinan) : 済南、 Qufu (Ĉjufu) : 曲阜、

Zaozhuang (Zaŭĝuang) : 棗庄、 Taian (Taj'an) : 泰安

----- 以上すべて山東省の都市です。

Shandong-a (Ŝandong-a) Esperanto-Asocio : 山東省エスペラント協会

En la 10a de majo, mi flugis per matena aviadilo de Pekino al la aerhaveno Qingdao, kie mia malnova amiko, s-ro Yu Changlin, atendis min.

Li estas la vica ĝenerala Sekretario de Shandong-a Esperanto-Asocio kaj la ĝenerala Sekretario de Rizhao-a Esperanto-Asocio. Mi konatiĝis kun li en la 5a Pacifika Kongreso de Esperanto en Qingdao, 1992. Al mi estis grandaj surprizo kaj ĝojo, ke Rizhao-a Esperanto-Asocio donacis al mi grandan bukedon el belaj floroj por bonvenigi min. Li montris al mi unu foton prenitajn antaŭ la granda ŝtona memorgravuraĵo de d-ro L.L. Zamenhof en Qingdao. En la foto estis 5 fotitoj inkluzive de mi. La 4 fotitoj estas membroj de Rizhao-a Esperanto-Asocio, kun kiuj mi tuj baldaŭ povos renkontiĝi post 18 jaroj krom unu sinjoro, Li Naixue. Li nun studas en Jinan, sed lia familio restas en Rizhao. Mi memoras, ke li bone kantis ĉinajn kantojn en Esperanto en la buso, kiam ni havis tuttagan ekskurson al Laoshan en la kongresperiodo. Kaj ĉi-foje li oferis sian aŭton kun ŝoforo por preni min de la aerhaveno al la urbo Rizhao, kvankam li mem ne povis revidi min. Mi kore dankas lin pro la komplezo al mi. Ni veturis sur aŭtovojo, kiu kondukas al Rizhao.

Post unu horo kaj dekelkaj minutoj da veturado, ni atingis la urbon Rizhao. Ses membroj de Rizhao-a Esperanto-Asocio atendis nin en iu restoracio por bonvenigi min. Ili bonvolis regali min per bongustaj kuirajoj, sorgobrando "Baijiu" kaj Qingdao-biero. Mi povis tuj rekoni 2 sinjorinojn en la foto: s-inoj Liu Shuqin kaj Chen Yongying. Kaj mi



bone rememoris s-ron Li Yuansheng, la prezidanton de Rizhao-a Esperanto-Asocio. Ni ĉiuj estis junaj tiam. Krome, s-ro Wang Changkun kaj s-ino Ma Liyun (Belnubo) bonvenigis min. Ni ĝojis nian revidon post 18 jaroj kaj novan renkontiĝon.

Sekvante, s-ro Yu Changlin kondukis min al la hotelo, kiun li rezervis por mi. Tre luksa nova hotelo, konstruita en la lasta jaro.

Post unu horo da ripozo en la hotelo, li gvidis min al Rizhao-a Profesia Fremdlingva Instituto, kie lernas 3,500 studentoj diplomigintaj de supera mezlernejo. Li aranĝis mian paroladon pri Esperanto kaj nuntempaj japanaj aferoj en la japana lingvo por studentoj en japanlingva fakultato. Min atendis pli ol 20 studentoj en la 2a lernoĵaro. Ili lernas la japanan sub la gvido de du junaj instruistinoj, kiuj studis en japana universitato. Kvankam la studentoj lernas la japanan lingvon nur dum du jaroj, ŝajnas al mi, ke ili bone komprenis mian paroladon. Laŭ peto de s-ro Yu Changlin, ke mi propagandu nian lingvon inter studentoj, pli ol duono de mia parolado temis pri Esperanto, ĝia signifo kaj mia esperantista vivo.

Reprezentanto de la aŭskultantoj faris bonajn trafajn demandojn pri Esperanto: Kial d-ro L.L.Zamenhof kreis Esperanton? Kiel utilas Esperanto en la nuna mondo? Mi povis tuŝi la historion de Esperanto kaj la ideon de la kreinto-iniciatinto. Al la lasta demando mi respondis, ke Esperanto ebligas rekte interŝanĝi informojn kaj opiniojn inter popoloj kaj profundigos interkompreniĝon kaj amikecon inter popoloj. Esperanto ebligas ligi rekte koron al koro inter popoloj, trans baroj lingvaj, kulturaj, religiaj, rasaj, naciaj, kaj trans diferencoj de sociekonomiaj sistemoj. Eĉ se du landaj registaroj tenas amikecajn rilatojn en registala nivelo, tio ne signifas, ke la paca rilato inter la du landoj estos stabila kaj daŭros longe, se ne ekzistas disvolviĝo de amikaj rilatoj kaj interkompreniĝo inter la popoloj. Kaj eĉ se iu registaro ŝanĝos sian politikon teni pacajn rilatojn kun alia lando, kaj se ekzistas profunda interkompreniĝo kaj firma amikeco inter la dulandaj popoloj, ili ne permesos tion al sia registaro. Interkompreniĝo kaj amikeco inter popoloj vere garantias stabilajn pacajn kaj amikajn rilatojn inter la landoj. Kaj la mondo ne konsistas nur el du landoj kaj du naciaj lingvoj. Oni ne povas ellerni ĉiujn naciajn lingvojn. Ellerni

unu nacian fremdan lingvon estas ne tiel facile. Ellerni Esperanton estas multe pli facile ol ellerni iun nacian lingvon. Kaj mi ne forgesis aldoni admonon, " Vi evitu lerni Esperanton, se vi nur celas gajni monon per Esperanto." Rilate al nuntempa Japanio, studentoj demandis min pri Hokkaido: famaj skiejoj en Hokkaido, turismaj lokoj en Hakodate. La studentoj ŝajnas havi intereson pri Hokkaido pro la populara ĉina am-komedia kino kun la klimaksa sceno filmita en orienta parto de Hokkaido, "Fei Cheng Wu Rao---Serioza Interrilatato Dezirata"[ 非誠勿擾](2008). Kaj ne mankis demando pri la nuna japana ekonomio kaj mia impresoj pri Ĉinio. Unu horo da parolado rapide forpasis. Se mi sciintus pri la parolado, mi povintus prepari materialojn por tio kaj doni pli bonan paroladon al ili.

Subtenantoj kaj Esperanto-amikoj de Rizhao-a Esperanto-Asocio invitis min al bonveniga bankedo kaj regalis min per bongustaj kuirajoj kaj sorgobrandoj "Baijiu" vespere. Multaj el ili estas ekslernantoj de Esperanto. Ili havas amikigan drinkkunvenon kelkfoje en jaro.

Post la bankedo, s-ro Yu Changlin gvidis min al la Marborda Parko, kie nin atendis s-inoj Ma Liyun kaj Liu Shuqin. Ni promenis en la parko. S-ino Liu, kuracistino de Hospitalo por Virinoj kaj Infanoj de la urbo Rizhao, prenis min al la hotelo per sia aŭto. Tiel finiĝis mia unua tago en la urbo Rizhao.

Sekvantan matenon, en la 11a de majo, s-ro Yu gvidis min unue al Guilinlu-a Elementa Lernejo. Antaŭ mia ekvojaĝo, mi petis de li, ke mi deziras viziti lian lernejon, ĉar li estas vicestro de elementa lernejo. Enfluadas multaj el-kamparaj laboristoj en la urbon Rizhao, kie daŭras impeto de urbokonstruado: oni konstruas novan modernan urbon kun vastaj 4-koridoraj ĉefvojoj apud la malnova urbo: tie kaj ĉi tie altaj konstruaĵoj staras aŭ en konstruado en vasta tereno. Sekve multiĝis geknaboj de el-kamparaj laboristoj ĝis super 1500 kaj oni dividis la lernejon por geknaboj de el-kamparaj laboristoj en du lernejojn: unu estas tiu Guilinlu-a Elementa Lernejo, kies lerneja konstruaĵo kompletiĝis en la lasta joro, kaj la alia lernejo, kie s-ro Yu Changlin laboras, estas en konstruado de nova lerneja konstruaĵo. La lernejestro de Guilinlu-a Elementa Lernejo varme bonvenigis min. Min ege surprizis la granda panelo "Ni varme bonvenigas japanan edukiston s-ron Sawaya Yuiti" ĉe la

enirejo. Ĝuste ĉinstila bonvenigo! Li estas juna lernejestro, nur 37-jaraĝa. Laŭ s-ro Yu, ofte troviĝas junaj lernejestroj, ĉar kiam lernejestroj atingas aĝon de 50 jaroj, li/si havas rajton emeritiĝi kaj vivi per pensio. Mi suspektas, ke la registaro intencas enkonduki pli multe da junaj energioj ekipitaj per novaj scioj kaj konceptoj en lernejojn por korespondi al la drasta kaj rapida ŝanĝiĝo de la socio. Au tio estas mia troa supozo?

Mi povis rimarki, ke oni elspezas abunde da mono por la elementa lernejo por geknaboj de el-kamparaj laboristoj en la urbo Rizhao. La gelernantoj estas edukataj en bona eduka medio: nova moderna lernejo kun multe da diversspecaj lerniloj, bone ekipita ĉambro por scienca eksperimento, biblioteko administrata per komputilo, tenisejoj, tiel vasta kaj luksa ludejo, ke oni povos okazigi eĉ oficialan konkurson de atletiko, ktp. Gelernantoj estas tre viglaj kaj gaje min bonvenigis, kiam mi eniris la klasĉambron. Unu klaso havas a. 50-60 gelernantoj kun du prizorgantaj instruistoj. Du klasoj estas en ĉiu grado, do entute 12 klasoj. t. e. ĉirkaŭ  $2 \times 6 \times 60 = 720$  gelernantoj lernas en la lernejo. Plue, paralele kun la elementa lernejo staras aneksita infanĝardeno kun samgranda moderna konstruaĵo en la lerneja tereno, kio min forte impresis. Oni vartas infanojn ekde 2 jaraĝo en la infanĝardeno. Gepatroj povas labori senĝene pri siaj infanoj. Laŭ s-ro Yu Changlin, la urba registaro rigardas edukadon treege grava, precipe edukadon de geknaboj el familioj de el-kamparaj laboristoj. La lernejestro donacis al mi 3 kaligrafiaĵojn, verkitajn de instruisto pri kaligrafio en la lernejo, kiel memorajojn.

Due, s-ro Yu Changlin gvidis min al malgranda fabriko de privata entrepreno, kiu produktas diversspecajn litajojn kaj eksportas ilin al Eŭropo. Geedzoj administras la fabrikon kun ĉ. 60 dungitaj laboristoj. La prezidento diris al mi, ke li enkondukis kudromaŝinojn el diversaj landoj sed japanaj maŝinoj plej bone funkcias en fajna brodado. Li gvidis min en la fabriko kaj montris al mi la produktojn, kiuj ŝajnas al mi tre bonkvalitaj kaj certe bone vendotaj en Eŭropo.

Viziti hejmon en eksterlando estas la privilegio de Esperantistoj-vojaĝantoj. S-ro Yu Cahnglin akceptis mian deziron. Mi povis rigardi lian hejmon kaj kompreni lian hejman vivon. Li loĝas sur la 4a etaĝo en

la apartamentaro. Precize dirite, oni povas diri, ke en ĉinaj urboj, relative novaj, preskaŭ ne ekzistas privataj domoj escepte de kamparanoj. Oni loĝas en loĝkvartaro el apartamentaroj. Ekde 2005, li loĝas en tiu ĉi apartamento, kiu havas loĝĉambron, dormoĉambron por la geedzoj, ĉambron por filoj, manĝoĉambreton, studĉambron, malvastan kuirejon, duŝejo kun necesejo kaj sunĉambron. Ĉiuj ĉambroj kun centra hejtado ne estas tiel vastaj, sed modestaj kaj puraj. Supozeble la plankspaco povas esti ĉ. 100 kvadrataj metroj. Ĉiuj hejmmastrumaj elektraĵoj estas ekipitaj: 40-cola likvakristala televidilo sur la muro en la loĝĉambro, mikroonda forno, aŭtomata rizkuirpoto, elektra fridujo, elektra lavmaŝino kaj persona komputilo (Windows XP) kun likvakristala ekrano de 18 coloj. Mi skajpis kun vjetnama samideano per lia komputilo. Bedaŭrinde tiam ne aperis lia vizaĝo sur la ekrano, sed la voao klare aŭdeblis en tre bona kvalito.

S-ro Yu Changlin diris al mi, ke lia vivnivelo estas sub la mezo. Mi povas bone kompreni, kial li diris al mi tiel. Li havas du filojn. Lia pli aĝa filo estas instruisto en sia hejmloko kaj la pli juna estos ankaŭ universitata studento ekde la venonta septembro. La patro havas pezan ekonomian ŝuldon sur la ŝultroj ĝis la diplomiĝo de siaj filoj kiel multaj japanaj patroj en la aĝo de 50aj jaroj. Ni prenis tagmanĝon kun s-inoj Chen kaj Liu, partoprenintoj en la 5a pacifika kongreso de Esperanto en Qingdao. Ili laboras en la sama granda hospitalo. Ili eliris el la laborejo dum tagmanĝa horo por regali min per tagmeza bankedo. Ni havis agrablan tempon.

Je 15:30 venis aŭto por preni nin al Rizhao-a Nanoscienc-teknologia Instituto, kie oni studas aplikon de nano-teknologio al produktadoj. La instituto estas tre fama en Ĉinio pro la studo en nanoteknologio. La instituto havas diversajn fakojn kaj diverdajn aventurajn entreprenojn. La direktoro s-ro Chen Fugao diris, ke tuj baldaŭ la instituto translokiĝos al nove konstruita multe pli granda konstruaĵo en la parko de Altanovteknologiaj Industrioj en la ekonomi-disvolvata zono en la urbo Rizhao.

Ni vizits placon kun granda bela florbedo antaŭ la ekstreme luksa, moderna kaj giganta domo de la urbodomo, kiu impone elstaras kvazaŭ ĝi fiere simbolas la nunan grandan ekonomian disvolviĝon.

En la 12a de majo, matene, s-ro Yu prenis min al sia hejmo, ĉar li

bezonis kelkajn fotojn prenitajn de mia video-kamerao por interrete sendi kun manuskripto pri mia vizito al la redakcio de Ĉina Interreta Informa Centro-esperanto antaŭ ol la tagmezo. Post prilaboro dum kelke da tempo li finfine sukcesis kompletigi sian manuskripton kaj sendi ĝin kun kelkaj fotoj al la redakcio en la fiksita limtempo. Venis s-ro Li Yuansheng, prezidanto de Rizhao-a Esperanto-Asocio. Li donacis al mi busteton de L. L. Zamenhof, faritan el nigra fajenco, kiel memorajon. Ĝi estos mia trezoro.

### Q u f u (曲阜)

S-ro Yu Changlin bonvolis akompani min ĝis Qufu. Ni ekveturis tien per posttagmeza speciala ekspreso, kiu atingis la urbon Qufu post 3 horoj kaj dekelkaj minutoj preskaŭ akurate laŭ la hortabelo. Antaŭ 18 jaroj, kiam mi unuafoje vojaĝis en Ĉinio, ĉinaj ekspresoj tre malrapide veturis, kaj oni diris, ke neniam trajno atingas stacidomon laŭ la hortabelo. Tio estas jam malnova rakonto. La ekspresa trajno tiel rapide kaj akurate veturas kiel tiu en Japanio. La vagonaro estas tre moderna kaj komforta. En Qufu nin atendis 5 lokaj Esperantistoj aŭ Esperanto-amikoj/ekslernintoj de Esperanto. Ili bonvenigis min kaj regalas min per bankedo, kvankam ili ĉiuj estas/ restas "komencantoj". Mi elkore dankas ilin pro ilia gastamo.

Sekvantan matenon s-ro Yu reiris al Rizhao per frua trajno. Lin atendas multe da laboroj, kiujn li ne povis plenumi pro mia vizito. S-ro Yang Anbang, vicedestro de Biblioteko de la urbo Qufu, gvidis min ĉefe al Konfuceaj Templo kaj Domego. Ĉinaj literoj helpis al ni interkomunikadon. Li estas erudiciulo pri Konfuceo kaj tre komlezis al mi en ĉio. Li bonvolis akompani min ne nur al Zaozhuang sed ĝis Taian, por kio mi kore dankas lin. Posttagmeze ni prenis buson al Zaozhuang kaj atingis la rezervitan hotelon je 16:30.

---

### M i a p l e z u r o v e r s i h a j k o n

俳句の たのしみ

Gotoo Sumiko

De antaŭ multaj jaroj mi havis intereson pri hajko. Oni diras, ke versado de hajko estas malfacile multe pli ol tio de tankao, ĉar la unua havas nur 17 silabojn, dum la lasta havas 31, krom tio laŭ tradicia

hajko oni devas meti sezonan vorton en ĝi. Cetere tankao estas virineca, kontraŭe hajko estas vireca, tion oni ankaŭ diras. Sed tiu vireco kun decidemo de mallongaj vortoj ja plaĉis al mi.

Antaŭ ĉirkaŭ 40 jaroj, kiam mi komencis vivon kiel instruistino de elementa lernejo, mi hazarde ĉeestis en iu kunveno de EVA(Esperanta Virina Asocio). Laŭ mia memoro ĝi okazis kiel unu el fakkunsidoj de Kansaja aŭ Japana Esperanto-Kongreso. En tiu fakkunsido mi trovis unu belan nekonatulinon el la estraranoj de EVA, kiuj sidis ĉe antaŭa loko kontraŭ ni, ĉeestantoj. Kun multe da scivolemo mi flustris al iu najbara sidanto. "Kiu estas tiu bela estrarano?" Do, la najbarino respondis.

"Ĝi estas Kita Satori, kiu estas hajkistino pli fama en hajkista mondo ol en esperantujo. Tiu informo mirigis min tiel multe, ke mi decidis, ke se mi emeritiĝos, mi lernu hajkon de ŝi.

Siatempe mi ne povis disponi mian liberan tempon: mi estis ĉiam okupita pri mia lerneja laboro tiel, ke eĉ hejme mi laboris por lerneja tasko. Tiutempe sabato ankoraŭ ne estis ferio. Kvankam sabate gelernantoj finis lecionon tagmeze, sed mi kutime laboris ĝis vespere en mia klasĉambro por kontroli kajerojn de 40 gelernantoj(tiam unu klaso havis pli ol 40 gelernantojn). Kaj dimanĉe kutime mi hejme faris semajnan klasgazeteton por disdoni al la gelernantoj ĉiulunde. Tiamaniere mi pasigis tagojn ĉiam okupite tiel, ke neniel mi trovis mian propran tempon distriĝi per hajko.

En la jaro 1999 mi ekŝiĝis iom pli frue ol emeritiĝo, kvankam mi daŭrigis instruecon kiel komisiita instruisto 4 tagojn semajne. Tiamaniere mi finfine ekhavis disponeblan tempon. Ĝuste tiam mi havis bonŝancon informiĝi, ke unu el miaj amikinoj lernas hajkon kaj hajkeskan bildon(俳画)de s-ino Kita Satori. Do, mi tuj petis ŝin diri al s-ino Kita Satori pri mia espero lerni hajkon en ŝia societo.

Tiel mi en la novembro de tiu jaro membriĝis al ŝia hajka societo, kiu nomiĝas Taiju (大樹).

Nu, mi volas iom skribi pri la "Taiju", kiun fondis la patro de Satori, Kita Sanga (北山河) en la jaro 1927, do antaŭ 3 jaroj la societo jubileis sian 80 jariĝon.

S-ro Kita Sanga estis kaj ankoraŭ estas fame konata inter malnovaj hajkistoj pro ne nur talentoj de hajko kaj hajga-o, sed ankaŭ pro tio, ke

de la jaro 1949 li instruadis hajkon al kondamnitoj de Osaka Malliberejo kiel la unua enkondukinto de hajkoj al kondamnitoj en la tuta Japanio.

Kaj li eldonis unu libron de la hajkaro de ili kun siaj komentoj, titolite "La nokto antaŭ ekzekuto (処刑前夜)", kiu vekis grandan sensacion en sia tempo.

Tiu movado instrui hajkon al kondamnitoj en Osaka Malliberejo ankoraŭ estas daŭrigata. Ĉiumonate en periodaĵo de Taiju aperas iliaj hajkoj.

Tamen bedaŭrinde Kiata Sanga ankoraŭ 65 jara forpasis tro frue en la jaro 1958.

Pro tio heredis lian postenon la filino Satori. Ĝis tiam ŝi oferis sin por esperanta movado, kiel ekzemple ŝi pruntedonis sian domon al KLEG kiel la oficejon.

Sed heredinte la laboron de sia patro, ŝi devis oferi sin ĉi foje por Taiju kiel direktoro de la societo. Taiju nun havas ĉ. 400 membrojn, al kiuj apartenas 20 grupoj en la tuta lando, precipe multaj membroj troviĝas en Okinavo, kvankam lastatempe la membraro malmultiĝas pro maljuniĝo.

En la ĝardeno de la sintoa sanktejo Osaka-Temmanguu fama pro la Tenjin-Festo troviĝas ŝtona monumento kun gravulita hajko de Kita Sanga.

Se vi iam vizitos la sanktejon, b.v. aperezi ĝin.

Cetere mi lastatempe informiĝis, ke la menciita libro "処刑前夜" baldaŭ reaperos. Se vi havos intereson, b.v. aĉeti ĝin.

Post kiam mi komencis versi hajkon, mi fariĝis observema kaj sentema kontraŭ ŝanĝiĝo de miaj ĉirkaŭaĵoj laŭ sezonoj. Cetere tiam mi havis taskon versi hajkon almenaŭ po 12 dum unu monato. Ĉar mi ĉiumonate ĉeestis en hajka kunsido de mia grupo. Por la kunsido ĉeestantoj devis pretigi 5 siajn hajkojn.

Kaj ĝis ĉiu monatfino la societanoj devas sendi 7 hajkojn al la centra oficejo de Taiju por monata periodaĵo. Do, mia penso fariĝis ĉiam okupata pri hajkoj.

Nu, mi volas skribi pri enhavo de hajka kunsido: unue ĉiuj ĉeestantoj skribas 5 siajn hajkojn po unu sur 5 slipoj sen subskribo (出句), kiujn zorganto kolektas, miksas kaj disdonas al ĉiu el la membroj po kvin. Sekvante ĉiuj membroj nete kopias tiujn 5 hajkojn de la slipoj sur aparta papero (清記), kaj numeras la paperon dekstrume de gvidanto.

Poste la numeritan paperon ĉiuj turnas laŭvice denove dekstume unu post la alian, kopiante la skribitajn hajkojn sur sia kajero, intertempe elektante 5 al si plaĉajn hajkojn, kiujn ĉiu skribas sur la aparta papero (選句). Kaj finfine la zorganto kolektas la paperojn kaj voĉlegas la elektitajn hajkojn, nur tiam malkaŝas la nomon ties versinto! (披講)

Krom tio gvidanto havas taskon elekti ŝatatajn hajkojn, kaj komenti kialon de la elekto. Nome la hajka kunsido estas kvazaŭ eta konkurso. Se miaj hajkoj akiros multe da elektoj (高点句) aŭ elekton de gvidanto, (特選), kia stimulo al mi estos!

Krom tio mi havis ŝancon tiel aprezi multajn alies hajkojn, tio kio lernigis min multe.

Krom tiu monata hajka kunsido Taiju okazigas ĉiujare grandan hajko-kunsidon(konkurson). Partoprenantoj antaŭe sendas 3 hajkojn al la centro, kaj 13 elektantoj elektas respektive 10 hajkojn kun kaŝitaj nomoj de la versintoj. Kaj tiu, kiu elektita de plej multaj elektantoj(選者) fariĝas la plej eminenta hajko en tiujara kunsideo kaj la versinto gajnas la unuan premion. En la komenca tempo de mia hajko-amanta vivo mi gajnis tiun unuan premion per jena hajko: 遠泳を終えて大きく見える子等, kvankam post tiam mi neniam sukcesis.

Pripensado por versi hajkon efikas vigligi cerban funkciadon, kio utilas defendi kontraŭ demenciĝo. Krom tio hajko-versado estas ja mia plej granda plezuro!

昔から俳句に興味がありましたが、小学校に勤めるようになって、とても趣味に費やす時間は、ありませんでした。関西エスペラント大会のEVAの分科会で北さとりさんに出会い、彼女が、有名な俳人と聞いて、退職したら是非、彼女の主宰する「大樹」に入ろうと決めていました。

大樹は、さとりさんの父、北山河さんが80年以上前に創った結社で、山河さんは、日本で一番最初に受刑者に俳句を教えた人です。その句をまとめた「処刑前夜」の本がその頃ベストセラーになりました。

退職後、大樹に入り、毎月句会に出席し、俳句大会にも出句し、作句の醍醐味を味わっています。(札幌に引っ越してから句会だけは、出ていませんが、投句は、続けています。) — 後藤 純子



\*Eskalo 第135号(2010年第2号)、2010年4月28日、川崎E.会、B5 X6頁のうちE文1頁弱。トップ記事は3月31日の「お花見」報告。初級クラス紹介、ベトナムで活動中の臼田玲子さん紹介など。

\*NOVA VOJO: N-ro 462 majo 2010, EPA (エスペラント普及会)、A5 X34頁中E文は8頁半。第20回国際エスペラント合宿(4月、熊本)の記事が8頁。この合宿は1991年以来韓国と日本(九州)で交互に行われてきた。裏表紙には合宿のカラー写真11枚。

\*Ponteto/ (Bulteno de Esperanto-Ligo en Regiono Kantoo: 関東エスペラント連盟)/ Majo 2010 N-ro 240; B5 X24頁のうちE文は関東エスペラント大会のお知らせなど2頁半。このお知らせのタイトルは開催地調布市にちなんでか[「鬼太郎も生きられる地球に!」2010年国際生物多様性年](Ankaŭ Kitaroo vivu sur la terglobo!2010, Jaro de Vivaja Diverseco)とある。4月八が岳での合宿報告、18人参加。「アジアは面白い、アジアの運動はもっと面白い/堀泰雄」はKAEM(アジアエスペラント運動委員会)の前委員長だった筆者がアジアの運動の歴史と問題点を8ページに渡って述べている。

\*Novajoj Tamtamas:/ N-ro 249/majo 2010, JER( Yokohama Esperanto-Rondo, Hama-Rondo) 発行、A4X4頁、全

文エスペラント(E.)。Vivo en la Dezert-lando/YAMAZAKI M. は筆者の体調悪化中だが未発表原稿はまだ残っていること。

\*La Suno/92, 2010年5月1日発行、山梨エスペラント会、B5 X20頁のうちE.文6頁半。この号からカラー写真やカットがたくさん入り美しくなった。編集人の一人は中国に出張中の梁川敏さん。Emilo kaj la Detektivoj とE. 一日一言が連載中。

\*La Tamtamo: 第421号, 2010年5月号, A4X8頁, JER発行、日本文。合同学習会での unuminuta sinprezento, 楽しみながら学ぶ歌や Jan-ken-ludo の活用、八が岳E.館でのE.で歌う会、FM横浜からの電話インタビューなど。

\*受講生通信 第130号, 2010-6-01, 沼津エスペラント会, B5X12頁の内E.文1頁。受講者からの便りの  
> 「えた・ひにん」が差別語なら「天  
> 皇、皇族」もそうでないか

で気づいた。「人の上に人を作る」のは、こちらのほうだ。催し物の頁に北海道E.初夏合宿、北海道大会の予告。

\*La Movado; 関西エスペラント連盟 (KLEG)発行, N-ro 712 junio 2010, B5 X16頁のうちE.文5頁弱。巻頭記事は「関西連盟は社団法人になります」。「hajko の作り方/広高正昭」が連載開始。Ĉu moskito aŭ kulo?/MATSUMOTO Sunao はヨーロッパと日本の我々

の用語の違いに気づいた記事。PIV でわからないかな？運動記事に「札幌で6月に合宿」

\*Mejlstono: 2010 majo N-ro 219  
仙台E会: B5X 10頁中E.文は1頁強。  
合宿の季節。仙台緑の合宿は6月26～27日。機関誌紹介に Heroldo de HEL の初夏合宿案内、Flusomera と文字化け。流れる夏？

\*NOVA VOJO: N-ro 463 junio 2010, EPA (エスペラント普及会)、A5 X34 頁中E文は10頁。「Oomoto internacia 五年の歩み」が巻頭言。「デンマークの学校——で使われる言語」: 英語は小学校から必修だが公用語ではない。Rakonto de vegetarano-demandoj kaj respondoj: 仏教の「殺生戒」に似た表現もある。

\*Novajoj Tamtamas:/n-ro 250/junio 2010, JER 発行、A4X4頁、全文エスペラント。Kakimaru, kiu faras vazojn (Jošida Genjiroo, esp-igis AIDA Kiyoshi)は第4回で完了。Vivo en la dezertlando は第5回、Birdoj vizitas nian balkonon/Mizro IWAYA は、北海道でも同様に書けそう。

\*La Tamtamo: 第422号, 2010年6月号, A4X8頁, JER発行、日本文。巻頭の「呼びかけ」は「2010年はエスペラント再学習の年にしよう！/宮崎英子」学習会だより には中級1、中級2、中級3、Jokohama Salono, 水曜会話、水曜中級1、歌唱クラス、と花盛りの感じ。新連載の「RETO 2.0 共同で作

るインターネットのエスペラント素材/柴山純一」が注目される。

\*Eskalo 第136号(2010年第3号)、2010年6月23日、川崎E. 会、B5 X6 頁のうちE文半頁。トップ記事は5月千葉で開かれた JEI合宿「セミナリーオ」、ていねいな説明で様子がよくわかる。例会に参加している小学5年生の感想も。

\*La Movado; KLEG 発行, N-ro 713 julio 2010, B5X16 頁のうちE.文2頁半。巻頭記事は「長崎の日本大会に参加し、大会を成功させよう」。「エスペラントふれあい旅行/あらいとしのぶ」は3回目で終わり。坪田幸紀さん(OES)、昔の苫小牧工業エスペラント会の指導者渡部隆志さんの福井での教え子の訃報。

\*Rōmazi Kenkyū: 2010年7月1日: 第13号: 日本ローマ字研究会 (NRKK) A4 X12頁、日本語(ローマ字を含む)。Otayori 欄には札幌の故栃内前会長の長女、Kitami-si, Itō Seiti など北海道からのものが多い。

\*NOVA VOJO: N-ro 464 julio 2010, EPA, A5 X34 頁中E文は12頁。第6回アジア大会関係記事(写真)が13頁以上。大会参加者二百余人のうち七十人の日本人はモンゴルへの入国にビザを取る必要がなかったが、アジアの多くの国からの入国にはビザが必要で、かなり苦労があった、と巻頭言「アジアの統一にむけて」は述べている。

[第4回委員会報告] Protokolo de la 4-a Komitato Kunsido

日時：2010年4月29日（土） 13:～

場所：札幌市北区北8条西3丁目 札幌エルプラザ2階会議コーナー

出席：後藤義治、後藤純子、横山、阿部、中田、椿正一、椿曜子、星田（記録）

欠席：佐藤不二雄、大山口

[議事]

\*組織：退会者—清水寛、古館勝彦。

会費滞納者には随時納付催促文を送り一定期間後機関誌発送を停止する。

\*広報（HP）：法人契約に切り替える。

\*メールマガジン：4月2日No.137発行、1030部。読者増加、初級講座の影響？

\*図書：JEIからの注文（Ainaj Jukaroj 10部）は発送済み（横山）

初夏合宿の機会に会場に運び参加者に配る。

\*機関誌：4月24日 No.129 発行 110部。

原稿募集の例（大阪エスペラント会）：募集の企画を機関誌に出し、毎度10人ぐらいに往復葉書やメールで原稿を依頼する。

\*初夏合宿：6月5～6日、柴田内科循環器科研修センターにて。5日午前、準備や図書搬入もあるので早めに（10時ごろ）開けてもらう。受付担当—阿部映子

\*北海道エスペラント大会：10月2～3日（9～16時）、かでの2・7、1020号室（36人用）。2日17時から bankedoを予定。講演（報告）にはキューバの世界大会などを予定。

\*2011年 JEI全国セミナー：JEI から北海道での開催について打診があった。時期は5月の連休、2泊3日。開催の方向で会場検討に入る。

\*エルプラザ市民企画講座：まだプラザ側の予定が出ていない。

\*次期委員会：6月6日（日）13時、初夏合宿終了後。

[第5回委員会報告] Protokolo de la 5-a Komitato Kunsido

日時：2010年6月6日（日） 13:～

場所：札幌市西区西野1条7丁目 柴田内科循環器科研修センター

出席：後藤義治、後藤純子、横山、阿部、椿正一、椿曜子、星田（記録）

欠席：佐藤不二雄、大山口

[議事]

\*広報（HP）：HPを見て連絡してきた人2人、内1人は初夏合宿に参加した。

\*情報・宣伝：北海道新聞の「知っ得北海道」に初夏合宿の記事、効果あった。

札幌市広報にも「後援、共催」などの場合載せられる。

苫小牧の講習会は毎年市の広報に載せ、「後援」ももらっている。

\*初夏合宿

参加者23名（講師を含む）。参加者に入会を働きかけるように考える。HEL 会員の優遇措置を考えたい。今回講師の直前変更があったが、こんな事態にも対応

できるように考えておく。

\*図書：柴田内科研修センターに運び込んだ資料の仕分け（選別）の日を決めて作業にかかる。

\*2011年 JEI全国セミナー：例年50人程度、5クラス編成。

道側からの提案：外国人講師、札幌の観光案内作成（柴山理事同意）

\*北海道大会：外国人出席者：Ges-roj Senecal(2005年来道)。

この機会に2012年日本大会の LKKを開き、役割分担まで決めたい。

\*次回委員会：7月10日（土）13時、エルプラザ2階打合せコーナー

\*\*\*\*\*

[編集後記/Redaktanto parolas ...]

\*いつも原稿不足を心配、「書いてください」と頼んでいたが、書く人は頼まれないでも書いてくれて、積み残しができました。La red. も、ウランバートルのことも書かねば、と思ったが頁は満杯、次へまわします。

\*来年の合宿は、例年 JEIが5月連休に実施している全国セミナーに合流することになるでしょう。北海道での開催を打診され検討中。一流の講師たちを迎えて学力を磨きなおよすチャンスです。

\*北海道大会（10月）に来たい、との連絡がフランス、韓国から。おもしろい大会にしたいものです。

\*\*\*\*\*

北海道エスペラント連盟 会費/年

正会員 3000円、青年会員（26歳未満） 1500円、

購読会員 2000円、家族会員 1000円

HOKKAJDA ESPERANTO-LIGO

ĉe HOŝIDA Acuŝi

Miyanomori 2-18-18, TOMAKOMAI

053-0844 JAPANIO

TEL-FAKS:0144-74-2539

Retadreso:hosidaacusi@kir.biglobe.ne.jp

Postgirkonto (郵便振替) : 02700-6-17075

\*Sekretario: KAWAI Yuka

N-ro 45, Simin-Katudo-Sapoto-Senta

Sapporo L-Plaza 2F, Kita 8 Nisi 3

Kita-ku, Sapporo, 060-0808 Japanio

TEL-FAKS : 0126-62-4636

Retadreso : nordano@sea.plala.or.jp

\*TTT-ejo : <http://www5d.biglobe.ne.jp/hel/jp/index-j.htm>

北海道エスペラント連盟

〒053-0844 苫小牧市

宮の森町2丁目18-18

星田 淳 方

\*事務局：川合由香

〒060-0808 札幌市北区

北8条西3丁目札幌エルプラザ

市民活動サポートセンター レターケースNo.45